

願成寺報

平成十六年二月十日

〒四四〇・〇八二 豊橋市東新町二十八番地

☎ 〇五三二・五二・九六〇一

■ 報恩講のご案内

左記により報恩講を勤修いたします

報恩講は御開山親鸞聖人のご恩を報ずる法会で、真宗寺院および門徒にとつて一番大切な行事です。今年は聖人の七四二年忌に当たります。万障お繰り合わせの上、お誘い合わせてお参り下さい。早春の一日をゆつたり過ごして頂ければ幸いです。

― 記 ―

二月 二十一日(土) 午前十時 法話 戸田 信行 師

お非時(粗飯準備します)

午後一時半 法話 戸田 信行 師

二十二日(日) 午前十時 法話 戸田 信行 師

お非時(粗飯準備します)

午後一時半 法話 戸田 信行 師

汁粉

○ 今まで春の彼岸(讚仏会)と一緒に報恩講をお勤めしていましたが、今年も昨年と同様に別々に勤めることと致しました。

まだまだ寒い時節ですが、おだやかに、賑やかに勤めが出来たらよいなと思います。

大型ストーブの威力はあつたようです。本堂内で寒いという声は聞かれませんでした。安心してお参り下さい。

○ 法話を昨年と同じ戸田信行先生にお願いしました。昨年は『仏法は聴聞に尽きる』『往生安楽国』などお話を頂きました。忙しい先生ですが、今年は昨年よりたつぷりお話頂けます。是非ご聴聞下さい。

○ お非時(お寺で午後に振舞われる食事のこと)

昨年と同様に、お弁当+温かい味噌汁等を計画しています。だんだんと昔ながらの形に戻していけたら良いなと思います。

○ 毎年お願いしていた本山義納金(金壱千円)について

御影堂修理の募財をお願いしていることもあり、昨年と同様、集めません。修理の募財をお持ちより頂ければ幸いです(後述)。



『バカの壁』について

昨年のベストセラーとなった、養老猛司先生の『バカの壁』を読みました。養老先生は、脳化社会（＝意識中心社会）をキーワードに現代社会が抱える問題を分析しておられます。そして、どう生きるかについて示唆されます。面白く・読み易かったのですが内容をまとめるのは難しく、私の手にもあまりまです。本の内容でなく、私の理解を記します。

世界には二種類がある。

・ 脳の外側（実態世界）

現実として私に完全には理解し得ない世界、言葉などで安易に表現できない、常に変化、身体、無意識、個性豊かな者・物の集合体相互依存性にて成立（縁起の法）

・ 脳の内側（虚像世界）

情報として私（私達）に理解された世界、例えば言葉で表現される概念のように不変脳、意識、共通了解による均質な共同体自己同一性を求める（昨日も今日も私は私）絶対的真実（一元論・唯一神）の棲む世界

現代社会は「情報化社会」と言われるように、虚像世界に重点が置かれ、実態世界を置き去りにした社会である。そのため、いろいろな「あべこべ現象」が起きている。

・ 科学・理論は絶対だと妄信していること

・ 理論に反証されうる曖昧さを探るのが本当の科学

・ 個性を伸ばせという教育

・ 共通了解を前提とするから、没個性を心配する

・ 身体を前提にすれば個性的なのは当然なのだから、

・ 他人の気持ちを判れ、俺を見習え、…等が本来の教育のはず

・ 約束を守らなくなった（言葉が軽くなった）

本来言葉が不変で、私は変化し頼りないものであるのに、

私は私と思つた瞬間、言葉が頼りないものと認識されるようになった

・ 経済活動が生産活動でなく消費活動になった

・ 共同体がバラバラになった

・ 共同体の一員としての自分を発見するのではなく、

私の集まりとして共同体を認識するようになった

・ そして、私の存在理由が判らなくなった

…等…

私の存在理由や絶対確かなことは、実態世界の中にあるのだ。それを求めていくことが重要なのであつて、安易に科学なり宗教なりに安住しようとしてはならない。迷つたり、悩んだりすることが生きる意味であり、意味について考え続けることこそ大切な作業である。正解はない、という共通認識があれば、互いを認め・許しあえる住みよい社会が構成できる筈である。

西洋の哲学者パスカルは「人間は考える葦である」と、私（＝意識）の頼りなさを表現しました。「強さを求めることは、自分の弱さを知っていくことと同じ」という言葉を思い出します。

人生行路の船頭として、私（＝意識）は、あまりにも頼りない。では何を先立てるのか？ 『念仏』だ、というのが真宗門徒の答えでしょう。ただし『念仏』自体は、答えというより問いなのだと思います。少なくともそんな一面を持っていると…

弥陀大悲の誓願を ふかく信ぜむ人はみな

ねてもさめてもへだてなく

南无阿弥陀佛ととなふべし

《正像末法和讃より》

無意識・意識を超えた所から、大丈夫だからしっかり悩み・迷いなさいと、阿弥陀様が励まして下さっているように思えます。

（住職 福澤 秀倫）

二河白道の譬

この譬話は今から約千三百年前中国にお生まれになられた善導大師が、佛道を極められた心の道程を誰にでも分かり易くお説き下さったものです。

「旅人」が「無人空廻（ムニンクウコウ）の澤」で幸せを求めて歩いていると、「尊い人」が現れて「西に向かつて進みなさい」と云われました。旅人は云われる通り西に向かうと忽然として大きな二つの河が行く手を阻んでしまいました。「火の河」と「水の河」です。よく見ると、二つの河の間に細い白い道がありました。旅人が立っている東の岸から西の岸へ渡る道です。心配しながら渡り始めると、火と水の勢いはだんだん強くなってきます。仕方なく帰ろうと思つて振り返ると、東の岸には群賊悪獣が集まってきて今にも旅人を殺そうとしています。行くに行かれず、帰るに帰れず、留まるに留まれず、三定死（サンジヨウシ）になってしまいました。地団駄踏んでいると、西岸上から「汝一心正念にして直に來たれ、我能く汝を護らん、衆て水火の難に墮することを畏れざれ」と呼ぶ声が聞こえました。同時に火と水の河は静かに治まりました。

「旅人」は私達一人一人のことであり、「無人空廻の澤」は本当の幸せを教えてくれる人がいない世界を指し、「東岸の尊い人」はお釈迦様で佛の教えを指し、「西岸の尊い人」は阿弥陀如来を現しています。「火の河」「水の河」は私達が持っている煩惱で「火」はカッとなつて怒る瞋恚の心、「水」は、あればあるでもつと欲しい、なければないで欲しい底なしの欲を指します。「白道」は煩惱にかき消されつつ少しは持っている微かな求道心、「群賊悪獣」は求道を邪魔するものを指しています。

御開山親鸞聖人は、その御著書「教行信証」にこの譬をお示しになり、御自身は「大悲の願船に乗じて、光明の広海に浮かびぬれば、至徳の風しずかに衆禍の波転ず」と仰せになり、「阿弥陀佛に救われて、暗い人生が明るく転じ、みなぎる喜びが沸き、難度海の波濤も深遠な佛恩に感泣し、懺悔と感謝にむせぶ心に変わる」と教えて下さっています。

私もそのようになりたいと真剣に「南無阿弥陀佛」を念じ、阿弥陀佛の御心を頂きたいと一心に善に励んで行きますと、逆に、「外に賢善精進の相を表すことを得ざれ、内に虚仮をいだけばなり」「浄土真宗に帰すれども、真実の心はありがたし、虚仮不実のこの身にて、清浄の心もさらになし」の聖人のお言葉が身に沁みてきます。朝な夕なの勤行中も「定水を凝らすと雖も識浪頻りに動き、心月を観ずと雖も妄雲猶覆ふ」の一時として静まらない私の心が知らされます。

旅人のように欲や瞋りに畏れた者でなければ「無碍の光明は無明の闇を破する慧日なり」とか「念仏の衆生を観して撰取して捨てざるが故に『阿弥陀佛』と名く」とお説き下さる阿弥陀佛の威神功德にむせぶ喜びも味わえないと知らされます。歎異抄の「たゞ念仏して弥陀にたすけまいらすべしと、よき人の仰せを破りて信ずるほかに別の子細なきなり」の「たゞ」に至るまでの御開山聖人の御苦勞の程が有難く偲ばれます。

（前坊守 福澤 佳津子）



伝統行事の伝承

平成十六年と歳も改まり 新年と共に昨年あつた積み残した懸案事項や健康面についても 本年こそはと毎年心を新たににする訳で有りますが 歳の暮れになると反省の繰り返しにて私も七十年が過ぎてしまいました まあ 完全に出来ないのが人生かも知れません

さて 縁あつて願成寺さんの世話人の端に加わつて居る一人であります が 常々力不足を感じ何のお力にも成れず日々反省を致して居ります

話は替わつて 私の家が有りますのが祇園祭の区域に属しており毎年七月の第三金・土・日曜日に祭礼が執行されます 金曜日には手筒花火が放揚されますが これは今から四四六年前の西暦一五五八年今川義元の吉田城代・大原備前守が奉納したのが起源と云われています(古文書で確認の限り)

昔は科学が発達して居なかつた為 疫病が流行つたり 不作だつたりすると悪魔の仕業と思われました 悪魔は暗闇に棲むと思われていたのでこれを追い払う為に天空に向け火柱を上げる その他 戦勝祈願・五穀豊穰・無病息災を祈願して放揚されて来ましたが 手筒花火は人々の心の中に頼もしく深く浸透して行つたのであります

又 手筒花火は吉田藩の勢力圏にのみ作成・放揚を許されて居ました 重要な武器である火薬の使用を町人に許可してきた事は驚くべきことで 徳川本家と非常に近い城主が統治していた事 城主と町民とのコミュニケーションが大変良かった事等が偲ばれます

手筒花火の作成は祭礼の二ヶ月前から始まります まず竹藪(毎年概ね決定している)を決定し (内径が十二cm程度で三年以上経過した)竹を一m二十cm程度に切り出し持ち帰り 熱湯か火によって炙り油抜きを行う そし

て節を抜きヤスリで磨き三cm厚みの板にて火口を装着する その上に南京袋を巻き細縄を巻き 更に太縄を巻いて手筒の外観が出来上がります

火薬は煙火会社より黒色火薬(炭・硫黄・硝石)を購入しますが 同じ配合率であつても毎年火薬の力は同じではありません そこで火の色・勢いを調整するために細目から粗目の四種類の鉄粉を用います その年の火薬にて十本程度の試験込みを行い 今年の配合量を決定し 詰込みに備えます

手筒に火薬を詰めるのは前日の夜であります 今では鉄粉がコーティングされサビが遅くなりましたが 昔は鉄粉がサビて火の色が汚くなる為放揚する直近が必須条件で有りました

毎年氏子八ヶ町の青年は 火薬に配合する鉄粉の粒子の大きさ・混入率を極秘とし 祇園当日の火の勢い・火の色等の出来を競い合つてきました

現在では満十八歳以上で煙火講習を受講した者しか手筒を放揚する事は許されませんが 戦後ある程度の時期迄はその制約が無く 中学一年から放揚することが許され 放揚によつて一人前の男として認められました

最近ではメディアの取り上げも多く全国(青森県から宮崎県)から放揚の依頼が有り 豊橋全体では三十件程度遠征して居り 私どもの祇園祭奉賛会でも年に六・七回程度は依頼に応えて居ります

このような伝統芸能は 親から子に 子から孫へ と忠実に伝えて行きたいもので有ります

(総代会 中村 欽一)

